

## 前期シンポジウム報告

日本の大学に求められている  
国際通用力とは (2012年6月22日)

「グローバル人材」、「秋入学」といった言葉が飛び交い、大学の国際化が社会的関心事になっています。国際性は、大学の基本的な属性とみなされてきたものの、今日本の大学、特に学士課程教育に求められている国際化とは何を指しているのでしょうか。本シンポジウムでは、昨今しばしば言及される「国際通用力」「国際通用性」というキーワードを題材としてこの問いにこたえ(第1部)、さらに、本学の国際化、国際通用力の現状と展望についてパネルディスカッションを行いました(第2部)。

第1部では、金子元久氏(筑波大学大学研究センター教授・東京大学名誉教授)に「大学の国際通用力」というタイトルでご講演頂きました。金子氏は、大学教育は今、3つの点で国際的に通用するかどうかが問われていると整理されました。第1の国際通用性は、日本の学士号が他国においても学士号相当と認められるかという制度面での通用性です。第2は、大学で行われている教育と学習が、他国からみても適切な内実を備えているかという点での通用性です。そして第3は、大学卒業者の資質が、国際的な仕事環境で通用するかどうかという点での通用性です。

金子氏によれば、これらのうち、日本の大学は第1の制度的通用性に関してはすでに備えている。しかし、一旦その内実に目を向けると、第2の通用性が十分に確保されているかどうかは疑わしいと指摘しました。日本の大学生の学習時間は、特に授業外での学習時間が単位制度の想定と乖離しており、他国と比較しても短いことが明らかになっています。長年単位制を採用してきたアメリカ等に加え、欧州高等教育圏でも単位制の導入が図られつつある現在、制度と実態の過度の乖離は、国際的な信用に関わります。

金子氏は、日本のこのような実態の背景として、卒業研究や、ゼミなどの小集団での学習に重きを置く一方で、それ以外の授業が、密度の高い学習を求めるようには設計されてこなかったという大学教育の特性を挙げました。またそこには、学生は自ら学ぶべきであり、学習プロセスを教員がコントロールすべきではない、といった学生観や教育観が底流しているとも指摘しました。このような特性は、日本の大学教育の長所を形成してきた面もありますが、学生の

学習を今以上に促していく上では改善の余地があり、個々の大学がそれぞれの条件の中で対応を迫られていると述べました。

第3の通用性についても、日本の大学は大きな課題を抱えています。グローバルな経済競争の中で働く人材には、専門的な知識に加えて、抽象的な思考力などのコンピテンス、さらに自分なりの目標の設定や役割意識といった点での成熟度が求められると指摘しました。これらの資質は、国際的な環境に実際に身を置いて働く一握りの先端人材だけに関わるものではないと考えられます。外国語教育や留学(派遣・受入れ)といったメニューも有効に使いながら、個々の大学が、これらの資質をいかにして養成していくのが問われていると述べました。

第2部では、まず辻健次郎氏(国際センター職員)が、本学の国際教育交流の現状について解説しました。辻氏によれば、若者の内向き志向が話題になる中、本学では留学への関心が高まってきており、海外への派遣数も増加傾向にあります。そのような中で、語学力が派遣可能な水準に達しない、派遣先でうまく適応できないといった問題も生じてきているということです。海外からの留学生受入れについては、超短期プログラム(2~3週間)に対する協定校からの要望への対応、本学から海外への情報発信、計画的な国際連携やネットワーク参画等を、今後の課題として挙げました。

続いて池田伸子氏(異文化コミュニケーション学部教授)は、留学に送り出した学生は、留学先で成長し高い意欲と期待をもって帰ってくるが、それに応えるカリキュラムや環境を準備しなければならないと述べました。また海外から受け入れた留学生の期待に応える授業が不足している点も指摘し、従来からある日本人向けの授業をただ英語で展開するだけでは不十分で、留学生のニーズに応じた新たな授業が必要であるといいます。さらに日本人学生と留学生がともに学ぶ科目をより積極的に増やすことを提案し、これによって受け入れ留学生の増加がキャンパスの国際化に直結し、留学経験がない立教生の成長にも大きく寄与すると述べました。総じて、国際的に行き来する学生たちの期待に敏感に反応し、躊躇せずにチャレンジする中で、本学は国際通用力を高めるべきだと締めくくりました。

最後に、デイヴィス・スコット氏(経営学部教授)は、経営学部と経営学研究科のミッションや特徴的な教育の取組みを紹介し、国際化は、当該組織だけでは賅えない教育資源へとアクセスするための不可欠な手段であると述べました。経営学部が海外のパートナー校と共同で作上げた英語集中プログラムや交換留学プログラムはその一例です。また、今後のビジネススクールは国や地域にまたがるアライアンスによって成立するという展望のもと、同研究科国際経営学専攻の国際認証取得に向けた取り組みも進め、国際通用力の確保に動いています。次なる課題としては、優秀な学生を海外から集めるための9月入試制度の導入、ならびに経済的に不利な地域からも学生に来てもらうための奨学金の充実を挙げました。

3氏による話題提供に続いてフロアを交えたディスカッションを行い、盛会のうちにシンポジウムは終了しました。学内者限定でしたが合計50名以上の参加があり、その内12名は学生でした。本学の国際化、国際通用力に対する学生たちの関心がとても高いことを実感しました。



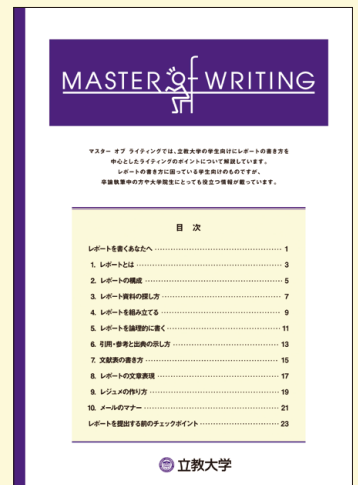
左から 金子元久氏、辻健次郎氏、池田伸子氏、デイヴィス・スコット氏

# Master of Writingは このように活用されています！

当センターでは、レポートの書き方やレジュメの作り方、メールの書き方などをまとめたMaster of Writingを制作・発行しております。

学内の多くの先生方が、このリーフレットを授業内で学生たちに配布するなどして教育に活用されています。

今号では、立教大学の先生方が、授業内でMaster of Writingをどのように使ってレポートの指導をされているのか、また、学生はどのような使い方をしているのかについて、2つの実践事例をご紹介します。



## 事例 1

コミュニティ福祉学部福祉学科 飯村 史恵 准教授 / コミュニティ福祉学部福祉学科 4年 坂本 佳子 さん

**Q: 飯村先生が所属されているコミュニティ福祉学部では、Master of Writingをどのように使っていますか？**

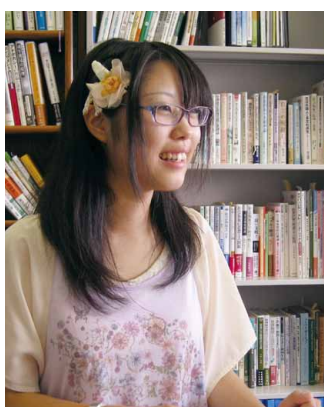
**飯村:** コミュニティ福祉学部では、1年生の基礎演習では学内の様々な部署から発信されている情報をまとめた基礎演習ガイドブックを作っています。このガイドブックにもレポートの書き方が入っているのですが、私はそれとは別に、Master of Writingを学生にファイリングさせています。コミュニティ福祉学部では教員間で基礎演習の授業の到達点を共有するため、運営マニュアルを作っているのですが、レポートの書き方を説明するときには何を教材に使うかは教員の裁量に任されています。私はMaster of Writingを使っています。

**Q: 飯村先生ご自身の授業の中では、Master of Writingを使って、どのような指導をされているのでしょうか？**

**飯村:** レポートの書き方については、私のほうでも説明する要点を絞った資料を作成し、Master of Writingと併用する形で学生たちに説明しています。特に、レポートの構成、アウトラインの立て方の説明の際には、Master of Writingを使っています。

今年、私が担当している基礎演習には21名の学生がいるのですが、レポートに関しては、半期で3回ほど、授業時間内に短めのものを書かせています。それに私が一人一人にコメントやアドバイスを付けてフィードバックしています。学期末には、少し大きなテーマを示して、そのテーマの範囲内で学生自身がテーマを絞り込むというかたちでレポート課題を出しています。

また、4年生の卒研を書く前の段階でも、おさらいという形でMaster of Writingを使っています。



坂本 佳子 さん

**Q: 坂本さんは、現在4年生とのことですが、1年生の頃、レポートを書くときに困ったことなどはありましたか？**

**坂本:** 大学に入って、レポートを書くときに一番困ったのはテーマをどうするかということでした。あと、高校生のころまでは、そんなに長い文章を書く機会がなかったので、大学に入ってから1600字とか3200字とか言われると、どういう構成にしたらいいのかが一番迷うところでした。

**Q: Master of Writingの中で理解できない部分や、分からないところなどはありましたか。また、役立った点や良かった点がありましたか？**

**坂本:** 内容的にはだいたい理解できました。最初分からなくても、やっていくうちに分かるようになったところもあります。あと、私が1年生の時にはNo.10「メールのマナー」がまだ発行されていなかったの、先生にメールを送るときにどう書いたらいいのか分からなくて困っていました。あの頃、これがあつたらよかったのに…と思います。高校の時はメールの相手は友達ばかりで、先生に送るといことがなかったので、件名をどうしたらいいのかとかが分かりませんでした。

レポートを書くときに一番よく見ていたところは、No.4「レポートを組み立てる」です。すぐにこの通りにはできなかったのですが、役に立ったと思います。あと、具体的な文例が載っているところが分かりやすくてとても良かったと思います。

**Q: 1年生の時と4年生の現在で、Master of Writingの使い方のポイントが変わったということはあるですか？**

**坂本:** 1年生の時は、とりあえずはレポートの形を作らなくてはならないということで、とにかく構成を気にしていました。あと、1年生の時に使っていたMaster of Writingは、ここまで詳しく引用や参考文献の書き方について書かれていなかったの、どこからどこまでが引用なのかとかが参考にしたときとの違いが分からなくて困っていました。今は卒研の準備をしているのですが、今回出たMaster of Writingでは、その点について、とても詳しく書かれていて、例も載っているので大丈夫です。

4年生になった今では、テーマを決めることでは悩まなくなりましたが、どうやってそのテーマを掘り下げていくのかと、参考文献の見つけ方などが悩むところです。

**飯村:** そうですね。大学入学の時点では、必ずしも小論文の書き方などをマスターしている学生ばかりではありません。1年生のはじめの段階では、文章を書く際の基本が理解できていない学生もいます。こうした基本的なところから、4年生の卒研レベルの学生まで、必要なスキルはかなり異なってくると思います。Master of Writingの内容のレベルが学生の書く力の熟達度に応じた作りになっていると、教員にとっても学生にとっても、より使いやすくなると思います。

将来、どのような進路を選択したとしても、報告書などを書く機会があると思いますし、学生には大学時代に論理立てて文章を書くことをきちんとマスターして欲しいと思っています。



**Q: 河野先生にはMaster of Writingの開発に携わっていただきました。また、レポートや論文の書き方についてのご著書もベストセラーとなっ  
ていらっしゃいます。学生にレポートの書き方を伝えようとなさるきっかけは何  
だったのでしょうか。**

**河野:** これまで立教生に限らず、たくさんの学生のレポートを見てきて、形に  
なっていないレポートが多かったということです。序論、本論、結論という基  
本的な形式や、小見出しを付けるということや、レポート全体を論理的につな  
げて展開していくというようなことが出来ていなかった。あとは、著作権意識  
ですね。引用・参考のルールが守られていないことも多かった。これは問題だ  
と思いました。

**Q: 河野先生の所属されている教育学科では、Master of Writingをどのよ  
うに使われていますか？**

**河野:** 私の所属する教育学科では、1年生全員に対して入学時のガイダンスの  
際に配布しています。教育学科では3年生になると400字詰め原稿用紙30枚分  
の3年次末レポートが課されます。2年次にはゼミがありませんので、1年次にど  
れ位、論理的なレポートの書き方を身につけるかが3年次末レポートを書く際  
に響いてくるように思います。1年次に入門演習という科目があるのですが、そ  
こでレポートの書き方を説明している先生もいると思います。

**Q: 河野先生の授業ではどうされているのでしょうか？**

**河野:** 演習やゼミなどでは、Master of Writingを説明して、実際に書かせて  
添削しています。3回くらい添削を繰り返すと、いいものが書けるようになって  
きます。

私のゼミでは、3年生、4年生、それから院生も参加してゼミを行います。3年  
生が論文やレポートの書き方で困っている時には、論文の書き方をマスター  
している4年生や院生にアドバイスをしてもらっています。ですので、私のゼ  
ミには3年生の最終段階でレポートがある程度きちんと書けないような学生  
はいません。

**Q: Master of Writingで説明されているトピックの中でも、特に重要と思  
われるところはどこだと思われますか？**

**河野:** レポートの構成や論理的に書くことはもちろん重要なのですが、No.3

で説明している「レポート資料の探し方」は特に重要だと思います。材料を集  
める、読み込む、そのプロセスの中で全体の構成を作り、論理的に組み立て  
ていくのですから。どれくらい多くの資料を集めるかということは、私の担当  
する入門演習の中でも重視していることです。

本格的にレポートを書き始める3年生などでは、No.6「引用・参考と出典の  
示し方」、No.7「文献表の書き方」が役立っているようです。

**Q: 先生のご経験から見て、Master of Writingをどのように使って指導す  
ると、学生の書く力が伸びると思われませんか？**

**河野:** このMaster of Writingで説明され  
ているのは、レポートや論文の形式面での  
ルールで、いわば型です。レポートを書く  
上で、できていなければならない最低限  
の形式のことです。また、他の文献からの  
引用の際の決まり事など、教員がルールを  
守るということを学生に厳しく示すことは  
重要なことだと思います。これは、教員で  
ある自分自身の襟を正すことにもつなが  
ると思っています。

さらにここから内容面、例えばテーマの  
面白さやアイデアなどを出していくとい  
うのはまた別の手順が必要になります。  
中身があって型がしっかりして  
いる、というものがよいレポート、論文ということになります。

学生がレポートを書く力をつけるためには、Master of Writingをただ  
配って、学生に「読んでおいて」というだけではダメだと思います。ゼミの  
ような少人数クラスで実際に使ってレポートを書かせる。それを教員が  
添削して返す、あるいは、学生相互に評価させるといった評価を繰り返す。  
このプロセスが有効だと思います。ただし、大人数の講義ですと、これは  
教える側にとっては困難です。受講者が多いと、せいぜいポイントを説明  
する程度になってしまいます。それですと、なかなか学生の書く力は伸び  
ないように思います。評価を厳しくしても、付いてくる学生は限られて  
しまい、付いてこない学生との差が広がるばかりです。これは大きな課題  
だと思っています。



河野 哲也 教授

インタビューまとめ：学術調査員 谷田川ルミ

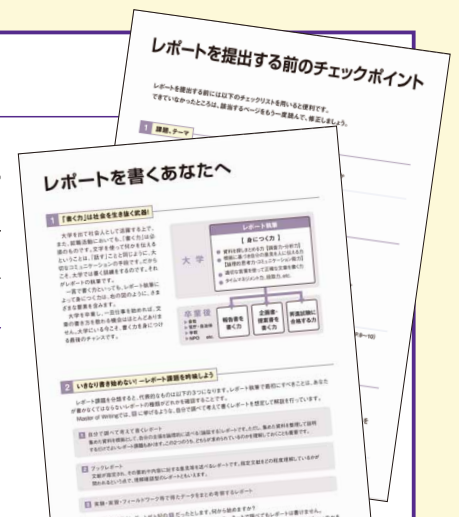
## 冊子版完成 〈Master of Writing〉冊子版の配布を開始しました

従来、Master of Writingは1トピック1枚というリーフレット形式で配布していましたが、この度、  
学生・教員のご要望にお応えして冊子版を作成しました。見開きで読め、保管が楽といった利点がある  
ほか、レポートを書く意義等の新しいコンテンツも追加されています。授業での使用をご希望の先生は、  
当センターまでご連絡ください。必要部数をお届けします。また、引き続きリーフレット版も配布して  
いますので、用途に応じて使い分けてください。リーフレット版は下記のURLからダウンロードすること  
もできます。

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet/>

冊子版の目次

- レポートを書くあなたへ
- 1. レポートとは
- 2. レポートの構成
- 3. レポート資料の探し方
- 4. レポートを組み立てる
- 5. レポートを論理的に書く
- 6. 引用・参考と出典の示し方
- 7. 文献表の書き方
- 8. レポートの文章表現
- 9. レジュメの作り方
- 10. メールのマナー
- レポートを提出する前の  
チェックポイント



# 紫縁談義

異文化コミュニケーション学部 准教授  
師岡 淳也(もろおか・じゅんや)



## 市民・社会的関与としての パブリック・スピーキング

本稿を執筆している現在(2012年7月)、原発再稼働に反対するデモや集会を開催する動きが全国各地で広がっている。こうした抗議行動には多くの学生が参加しているが、様々な手法を用いて自らの主張を訴えている彼らの姿を見るたびに、「大学でのスピーチやプレゼンテーションの授業(あるいは、授業におけるスピーチやプレゼンテーションの経験)が、彼らが人前で主張をする際にどれだけ役に立っているのだろうか」という疑問が頭をよぎる。

私はこれまで5つの大学でスピーチやプレゼンテーションといった「オーラルコミュニケーション科目」を担当してきたが、いずれの大学でも、学生や社会人(職業人)に求められるスキルを身につけることを主な授業目標としており、切迫した社会問題について自らの意見を公の場で述べたり、不特定多数の聴衆に訴えかけたりするためのスキルを高めることはあまり重視されていなかった。一方、米国の大学で使用されているパブリック・スピーキングの教科書では、「よい学生」「よい社会人」の他に、「よい市民」とりわけスピーチを通して自分自身や他者を力づけたり、公的事柄に積極的に関与したりする市民(engaged citizens)となることの重要性が強調されていることが多い。言い換えれば、パブリック・スピーキングが、市民・社会的関与(civic and social engagement)の重要な手段として捉えられているということである。

現在、日本の多くの大学で「パブリック・スピーキング」や「プレゼンテーション」と題した科目が開講されているが、前者は「人前で効果的に話すこと」、後者は「自分の考えをわかりやすく伝えること」と同一視されているように感じることがある。こうしたスキルの重要性に異議を唱えるつもりはないが、日本の大学では「パブリック・スピーキング」や「プレゼンテーション」といった授業が外国語教育科目や(アカデミックスキルを修得することを目的とした)基礎教育科目として位置づけられてきたこともあってか、市民・社会的関与としてのパブリック・スピーキングという考えにさほど関心が払われてこなかったのではないかと。本学を含め、社会連携を「重要な社会的役割であり使命」として推進する大学が増えている中、オーラルコミュニケーション教育のあり方の見直しが迫られているように思われる。

## 刊行物のご案内

### 大学教育開発研究シリーズNo.16「日本の大学に求められている国際通用力とは」

2012年6月22日に開催した当センター主催シンポジウム「日本の大学に求められている国際通用力とは」の詳細と配布資料を収録した記録冊子です(10月中旬発行予定)。ぜひご一読ください。



## 編集後記

本号でも、Master of Writingに関するインタビュー、紫縁談義と、多くの先生方と学生さんにご協力頂きました。改めて御礼申し上げます。なお、Master of Writingに関するご意見・ご感想がございましたら、随時当センターまでお寄せ頂ければ幸いです。内容の改善や新規開発の参考とさせていただきます。(谷村)

## 「MOVE 第10号」

立教大学 大学教育開発・支援センター ニューズレター  
2012年9月28日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター  
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615  
E-mail: cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>